

徒然の記 その十三

薪(たきぎ)

薪、と書いて「たきぎ」と読みます。同じ「たきぎ」でも、「焚き木」と「薪」では文字から受けるイメージがまるで違います。

「焚き木」というと細い枯れ枝を連想しますが「薪」というと、太い丸太を鋸で短く切って斧で割ったもの…「まき」を連想してしまいます。

いささか独断的ではありますが、前者の代表は、おじいさんが山で拾って帰る「しば」、後者の代表は町の薪炭店の店先に束ねて積まれている売り物の「まき」、そんなふうに思っています。

昭和 30 年代までは、家庭で使う燃料には、薪とか炭とか炭団(たどん)とか練炭(れんたん)が使われていました。

都市ガスや、プロパンガス、灯油が使われるようになったのは、それ以降の話です。

今の我が家はプロパンガスを焚くボイラー(給湯器)を屋外に置き、浴室のほか台所でも温水を使えるようにしていますが、以前は風呂と台所は別々のボイラーを使っていました。台所の給湯器は、プロパンガスを燃料とするありふれたものでしたが、風呂のほうは灯油と薪の兼用釜でした。

家の増築をした時、青梅に住む大工さんの勧めで据え付けたものでしたが、灯油のほか薪や木屑なども燃やせるので、ずいぶん役に立ちました。

霧状(きりじょう)の灯油がノズルから吹き出して燃え、バーナーのように満遍(まんべん)なく薪を炙(あぶ)るので、多少、湿っていても薪はたちまち燃え上がってくれました。

一度火がつけば、後は火が途切れないように時々薪を継ぎ足すだけでよいので子供でも風呂焚きができました。

薪を入れるのが面倒ならタイマーを風呂の沸く時間にセットすれば、灯油だけで風呂焚きができました。

もちろん、リモコンスイッチで浴室の中からの追い焚きもできました。

設置した動機は、増築の時に出た廃材＝古い木材や木っ端(こっば)の処分にありました。…資源の有効利用と灯油の節約、一石二鳥、理に適ったやり方だと思ったので、大工さんの勧めに従ったわけです。

当時はまだ家の周りには空き地がたくさんありましたから、そこへ取り壊した木材を積んでおき、手の空いた時に鋸で切り、薪割(まきわり＝鉈＝なた)で割って使っていました。

家の増築や改築をした近所の方が、処分してほしいと、古い木材を時々運んで来ましたので、薪の材料には事欠くようなことはありませんでした。

柱を鋸で切るのは骨が折れたので、電動の丸鋸を買ってきて使っていましたが、太いものを切る時は刃渡りが足りず、梁や太い柱は手に余りました。

そこで、高価なチェーンソーまで買い求めてきましたが、風呂を沸かす灯油の経費を考えれば十分ペイするものでした。

まだ小学生だった二人の息子は、よく薪割りの手伝いをしてくれました。

危険なので電鋸(でんのこ)やチェーンソーは使わせませんでしたが、見ている前でなら大まさかりや鉋を使うのを許しました。

次男だったと思いますが、夏休みの林間学校に参加した時、飯盒炊爨(はんごうすいさん)で焚き木を作ったり、火を燃すことのできたのは、ボクだけだったと胸を張っていました。

「薪を作る」「薪を燃やす」技術が立派に伝承されていたわけです。